



フィールドノートから

里山林の下刈りとギフチョウの産卵

オリンピック造成地のギフチョウ

長野冬季オリンピック（1998年）の白馬村の競技会場造成で、自然保護の面から注目された生きもののひとつに、ギフチョウがあります。アゲハチョウ科の日本の固有種で、長野県では北部と南部に生息しています。造成地の落葉広葉樹の里山林に、その辺りにのみ生育するミヤマアオイ（日本固有種）に依存するギフチョウがいました。

下刈りで増える産卵数

そのギフチョウを守るため、造成地の林床に生えていた食草のミヤマアオイが、隣の里山林に移植されました。しかしミヤマアオイは草丈が数センチメートル、里山林の下刈りがなされていないと周囲の植物に覆われ、産卵するギフチョウがたどり着けなくなります。そこで毎年、または4年に1回下刈りをする調査区をつくり、ミヤマアオイへの産卵数がどう変化するかを研究所で調べることにしました。

その結果、下刈りをしないとギフチョウはほとん

ど産卵せず、下刈りをすると産卵が増え、下刈りをしない年がづくとその効果が弱まることになりました。里山林が利用され、下刈りがなされていた時代には、産卵に合った環境がおのずと保たれていたのでしょう。



写真1. ミヤマアオイの葉の裏に産卵するギフチョウ（白馬村で・尾関 雅章 撮影）

里山の手入れでギフチョウを守る

化石燃料の時代となり、里山林が利用されなくなって、ギフチョウは全国で衰退し、絶滅のおそれのある種としてレッドリストに載ることになりました。カタクリ、アズマイチゲなどの里山の春の草花とともに命をつないできたギフチョウを、里山林の手入れで未来に残すことができないでしょうか。白馬村の調査区の下刈りは、やめられそうにありません。

（須賀 丈／自然環境部）

ハクバサンショウウオの産卵状況を記録する



写真1. ハクバサンショウウオ

希少種の発見

ハクバサンショウウオ *Hynobius hidamontanus* は、1975年に長沢武氏（元白馬村教育長）がはじめてその存在を明らかにし、1987年

に上田市出身の松井正文博士（京都大学名誉教授）が新種として記載した日本固有の小型サンショウウオです（写真1）。

本種の分布は岐阜、富山、長野、新潟にまたがる飛騨山脈の一部に限定され、長野県では白馬村と小谷村に生息しています。生息地が限られることから絶滅の危険性がきわめて高い種で、長野県の条例で捕獲が禁止されるほか、白馬村でも天然記念物に指定され保護が図られています。

産卵数のモニタリング

産卵は雪解け後の4～5月。水がしみ出す湿地の細流の枯れ枝などにコイル状の卵嚢を産み付けます（写真2）。当研究所では、この15年ほど、「しろつま自然の会」と協働して、白馬村内の主要な生息湿

地を選び産卵状況をモニタリングしています（写真3）。モニタリングは、大小10箇所ほどの産卵湿地で、水中に産み付けられた卵嚢を素手で探して数える根気のいる作業です。この15年のデータを見ると、比較的大きな産卵湿地で一定の卵嚢数が継続して確保されている一方、規模が小さな湿地では周辺の樹木伐採や周辺水路の改修などの影響で乾燥化が進み産卵数が減ってしまったところもあります。



写真2. ハクバサンショウウオの卵嚢

地域のかげがない生物

物言わぬ地域の宝「ハクバサンショウウオ」が絶滅の危険にさらされないよう、今後も地元の団体や教育委員会と情報共有をしつつ、注意深く見守ってゆきたいと思います。



写真3. しろつま自然の会と調査

（北野 聡／自然環境部）

